

町史のひとこま

河津筑後守貞重

高鳥居城址のある竹城山(標高三八一・四メートル)の山頂付近は『高鳥居』の名で呼ばれてきた。それが転じて城の名ともなった。

高鳥居城址のある竹城山(標高三八一・四メートル)の山頂付近は『高鳥居』の名で呼ばれてきた。それが転じて城の名ともなった。

『高鳥居』という地名の起りにについては、次のような説を唱えている人がいる。

昔(といつても、奈良時代以前のことだが、若杉山太祖神社に参拝する道は、今と違い、太宰府から宇美・須恵を経て峰伝いに上宮に至るのが正式のルートであった。齊明天皇の時、若杉山中腹の参道に、国家安泰を祈願して石の大鳥居が建てられた。以来、この地は『高鳥居』と呼ばれるようになった。▼合屋武城著『筑前若杉村郷土誌』による。

実を言うと、この説の当否を判断する材料を私はもたない。齊明天皇は、初め皇極天皇といった方で、七世紀半ばの女帝で

ヨリ始筑前ニ来リ、粕屋郡迫門河内七百町賜リ、高鳥井ノ壘ヲ新築シ、探題附庸ノ城トシテ、是ヲ守衛シ、同小仲庄ニ居住シ……と、高鳥居城という言葉はないものの、河津貞重による築城が記されている。

河津は、永仁元年(一一九三)鎌倉幕府の時の執権北条貞時から粕屋郡の莊園七百町を与えられ、鎮西探題北条兼時に従って筑前に移住してきた。

当時の小仲庄(現篠栗町尾仲)に居を定め館をかまえたが、そこには古くから村人の信仰を集める靈石二個があった。貞重にはこれが曾我兄弟の因縁と思われた。この永仁元年は、貞重と祖先を同じくする曾我兄弟の有名な富士のすそ野のあだ討ち(建久四年)からちようど百年目にあたっているからだ。一そこへ二面の靈石、貞重は感動し、曾我兄弟百回忌を供養し、両社八幡宮を勧請したと伝えられている。

これは、粕屋町の部木八幡神社のことで、具原益軒によると江戸時代には、祈願する人は木刀を作ってささげるならわしが

あつたそうだ。古くからの伝承として、上須を祭ったのが始めだといふので、恵の須賀神社も、河津貞重の創建とされる。高鳥居城の大手にあたる位置に城門を置き、あわ

〈筑前国のある武士の館〉

溝とへいをめぐらした地頭の館(やかた)。櫓門(やぐらもん)の上には楯(たて)と弓矢を置いて外敵に備えている。これは建治二年(一一七六)の様子をえがいたもので、河津貞重の館をほうふつとさせる。

— 国宝 —
遍上人絵伝
より。

せて須賀神(スサノオノミコト)を祭ったのが始めだといふので、(町誌編集委員会事務局・石瀧豊美)

